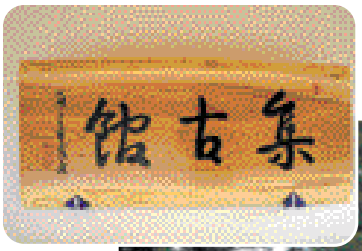
寺紋
柊（ひいらぎ） かこみ沢瀉（おもだか）
（通称 大関沢瀉（おおぜきおもだか））

大雄寺報

＝第３号＝
平成16年１月１日発行

発行所 黒羽山 大雄寺
〒324-0233
栃木県那須郡黒羽町田町450
ＴＥＬ　0287－54－0332
ＦＡＸ　0287－54－0330
編集発行人 住職 倉澤良裕

印刷所　タキザワ印刷



宝物収蔵庫「大雄寺集古館」完成

曹洞宗黒羽山大雄寺は、室町時代の様式を今に伝える総茅葺き屋根の禅寺である。本堂、禅堂、庫裡、総門、経蔵、廻廊、鐘楼堂からなる整った造りを保存している。
黒羽余瀬における創建は、1404 年（応永 11 年）。現在の七堂伽藍は 1448 年（文安5 年）に建てられたもので、黒羽藩主大関高増により、1576 年（天正 4 年）現在地に移築された。
永い歴史の中で保存されてきた寺宝を収蔵し、かつ、一般公開ができる蔵造り風の建物で、平成 15 年（2003 年）10 月完成しました。

宝物収蔵庫「大雄寺集古館」建設の歩み

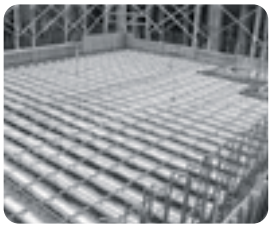
平成十五年三月十五日から平成十五年十月十六日

鉄筋組み（5／7）

ステコン（4／28）

整地作業（4／19）

地鎮式（3／15）


1階天井ウィンディングパイプ設置・鉄筋組み（6／13）

一階部分型枠（6／5）

まなこ型枠設置（6／4）

2階型枠外し（7／5）

1階部分なまこ型枠外し（6／30）

1階外壁と1階天井・2階床生コン（6／14）

1階展示ケース（9／11）

寄進者記名瓦 棟周囲に使用（9／5）

瓦屋根葺き（9／5）

2階内部（8／27）

1階展示ケース造作（8／27）

完成 側面（10／16）

完成 正面（10／16）

空調設備設置（9／24）

なまこ塗装（9／24）

足場外れる（9／13）

宝物収蔵庫「大雄寺集古館」について

当大雄寺は、黒羽藩主大関家菩提寺として創建され六百年の歴史を今に伝え、本堂・庫裡・禅堂・廻廊など諸堂全て貴重な文化財として栃木県の指定を受け、檀信徒の皆様と共に護持、保存に力を注いでいるところであります。

また、涅槃図や広凌観欄図や枕返しの幽霊などの絵画、墨書、掛軸、木像、書籍、陶器、漆器、甲冑類など文化財指定・未指定のものを含め数多くの貴重な宝物を保存してきました。しかし、現在これらの宝物は、粗末な保存をやむなくされており、温度、湿度、火災、盗難などの点において万全の保存方法に至っておりません。

二百年、三百年を経てきた貴重な宝物を万全かつ安全な保存体制にして、私たちの子孫に正しく伝えなければなりません。よって、種々の問題解決と安心を得られる宝物収蔵庫一部展示場を兼ね備えた建物を建設することを計画しました。

この収蔵庫が完成しますれば、安全な格納と宝物一般公開が可能になります。また、皆様方が所有する黒羽に関する資料や宝物を預かり収蔵することもできます。

昨年、平成十五年三月から建設工事に着手しました。順調に工事は進み、十月十六日完成し引渡しを受けました。

今後の予定として、宝物の一般公開は、平成十六年春から、落慶式は六月初めと考えております。

宝物の調査・整理・展示と進めなければなりませんが、大雄寺の歴史、黒羽藩主大関氏関係の資料を基に整理をしながら、格納と展示の作業を進めてまいりますので、どうぞ、ご意見やご希望がございましたらご遠慮なくお寄せください。

合掌

大雄寺住職　倉澤　良裕　拝

21世紀に伝える

母の愛モード

●●73●●

大雄寺住職

倉沢良裕さん

飾らず、仕事は一生懸命

草取り、掃除…1人で黙々と

祖父の代から大雄寺の住職を務めていますが、私が中学生のころまで、父が大雄寺の末寺にあたる源昌寺（黒羽町川田）で住職をしておりまして、家族全員がそこで暮らしていました。檀家さんの数は、大雄寺が八百なのに対して、源昌寺はたったの四十。そういう小さなお寺でしたので、生活は質素でした。

食卓では、食べ物の恵みに感謝する「五歓の偈」という短いお経を読むのが習慣になっていました。お経を読んだあと、母がつくってくれた料理を皆で食べるわけです。「おふくろの味」で思い浮かぶのは、カボチャの煮物のような素朴な料理ですね。

母は和裁などの内職などで家計を助けていました。飾らない性格で、朝から晩まで働いていました。私はというと、今とは違って、人前で話すだけで顔が真っ赤になってしまうような内気な子供でした。外で遊ぶよりは、家で仕事をしている母のそばにいるのが好きでしたね。

私が小学校に入る前のころ、こんなことがありました。私がずっと母に付き添っているものですから、母もさすがに邪魔に思ったんでしょう、ハサミを持った手で私を払おうとした。そのとき、ハサミが誤って私の右目に刺さってしまった。母は私をひもで背中にくくりつけて、自転車で町の中心部の病院に運んでいった。

幸いなことに失明は免れたのですが、視力が低下してしまい、私は眼鏡をかけることになった。眼鏡をかけている子なんて珍しく、学校でよく冷やかされました。時間がたっても、母は私に「申し訳なかった」と話していました。けれど、私は母を恨みませんでした。それだけ母のことが好きだったんですね。

父が大雄寺の住職になると、母の仕事も変わりました。檀家さんの数も増えるし、偉いひとたちがお寺に来ることも多くなり、母にかかる負担も大きくなった。それでも母は人を雇うこともせず、草取りや掃除を自らやっていた。そんな母を私はいまでも尊敬しています。

私は東京で学生生活をしていたときも、夏休みになると実家に戻って寺の仕事を手伝っていました。母からは「あなたは親の目が届く範囲を飛び越えない子。男ならもっと外に出なさい」といわれてしまいましたね（笑）。

母との別れは、私が副住職のころです。突然、「頭が痛い」と言い出した母に連れ添って救急車に乗った。意識不明の状態が六日間続いたあと、母は息を引き取った。遺言らしい言葉が聞けなかったこと、一生懸命仕事をしていた母にねぎらいの言葉をかけてやれなかったことは今も心残りです。

けれど、母は私や家族の心のなかで生き続けています。上京していた娘が夏休みに帰省したときのことです。娘は家族一人ひとりのためにケーキをおみやげに買ってきてくれたんですが、そのなかに母の分もあったんですね。かなり幼いころに母と別れたはずの娘が、晩年の母から受けた愛情を成長しても忘れていなかったのが、とてもうれしかった。

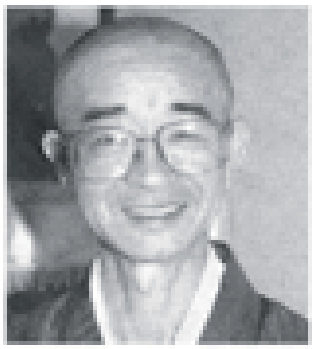
飾らずに一生懸命仕事をしていた母はいつまでも私の手本です。私は大雄寺を仏事、法要を行うだけではなく、人と人がかかわりを持てる場にしようと思っています。そんな「開かれた寺」を母にこれからも見守ってもらいたいですね。

（構成・宇野貴文）

＝毎週月曜日に掲載

◇

次回は五味渕整形外科医院事務長、若命昭雄さんの予定です。



倉沢良裕（くらさわ・りょうゆう）大雄寺住職。昭和26年、黒羽町生まれ。52歳。黒羽高校、駒沢大学法学部を卒業して法務省に入省。東京法務局で3年間勤務したあと、仏門に入り、平成3年から大雄寺＝応永11（1404）年に創建＝の第37代住職。住職の仕事のかたわら、学校などで心などをテーマに講演活動を行っている。家族は妻・与志枝さん（52）、長女・香織さん（24）、二女・香澄さん（23）、長男・文尭さん（19）。

母のヒロさんは大正13年、黒羽町生まれ。夫で第36代大雄寺住職の良一さんとの間に2男1女をもうけた。昭和61年にくも膜下出血で死去。享年61歳。

大みそかの家族だんらんのひとこま。右からヒロさん、父の良一さん、良裕さん、長女の香織さん、二女の香澄さん、妻の与志枝さん

＝昭和59年、自宅

胡弓コンサート感想

「大雄寺牡丹と胡弓の響き」に参加して

東京　朴　良子

五月晴れの中、早朝に出発し、東北自動車道を北へと走らせると、緑はよりはっきりと美しく空気も澄みきって心さわやかになってまいります。那珂川の清流を渡り大雄寺の門前に佇むと私はいつも「お母さん大雄寺さんに着きましたよ」と言います。黒羽は亡き母の里です。黒羽へお参りに行くときは、母も私と一緒に来ていると思っているからです。

杉木立の石段を登って行くとシャガの白い花が一面に咲いて、私たちを迎えてくれました。

廻廊を渡りお庭に入ると、それは見事な牡丹が庭一面に咲いて「まあ　すばらしい」と思わず大きな声を出してしまいました。本堂に入りご住職様のお話を伺いながら、美味しい五味糖をいただき、ほっと疲れが抜けて安らぎました。

間もなく宋雲先生の胡弓演奏が始まりました。その音色はなんとなく昔のことを思い出させてくれるような心懐かしい音色です。また、曲目も郷愁を呼ぶやさしい曲でとても素晴らしかったと思いました。本堂でお庭に向かって牡丹を眺めながら、こんなにも長い間座っているのは初めてでした。胡弓を聴きながら父母のこと、また祖母のことを思い、子供の頃の黒羽の思い出が次々に湧き上がってきて、自分ひとりが別世界に居るような気持ちでした。

また、魯先生や薫先生の京劇もたいへん楽しく見せていただきました。日本の歌舞伎に繋がるものがあるなあと思いました。

演奏は大雄寺の厳粛な空気と静かな佇まいにぴったりと溶け込んでいたと思います。

ちょうど牡丹の見ごろに素晴らしい企画で、日ごろドタバタと過ごしている私にとって最高の雰囲気に包まれた幸せなひと時でした。家族みんなでたいへん喜んで帰りました。良い思い出となる心安らぐ一日を糧に、またがんばります。

ご住職様はじめ関係者の皆様本当にありがとうございました。　合掌

大雄寺牡丹と胡弓の響き・京劇に寄せて

黒磯市　滝田　仁・久美子

五月晴れの好天に恵まれた当日、那珂川築の付近で川遊びを楽しんでいる人達を見ながら大雄寺へ急ぎました。

我が家の先祖は、天正の頃大関高増公が黒羽城築城の折手伝うように招かれて、烏山の瀧田から千本を経て、黒羽に移り住んだようであります。その頃から大雄寺の檀徒で、口伝では一切経の経蔵や和尚の隠居である月光庵の建設に関与していたように伝えられております。昭和五十七年経蔵保存修理の際、滝田夢心の名が記された棟札が出てきたことを聞かされ、たいへん感激いたしました。

杉木立の山道を登り、荘厳な大伽藍に一歩踏み入れると、中庭のまさに満開の牡丹に迎えられ、夢心地で本堂へ、そして、五味糖をいただいて乾いた喉を潤しました。

倉澤良裕住職から今回の胡弓演奏会開催の経緯について、中国より招聘予定の方が新型肺炎問題で来日できず困っていたところ、大雄寺日曜坐禅会の平田寛様のお力添えで、日本在住の演奏家に変更になったことなどの説明があり、司会者の流暢な出演者紹介や演奏説明で開幕いたしました。私たちが二胡の演奏をライブで聴きますのは、今回が初めてでした。見ごろを迎えた牡丹と歴史を感じさせる古き山門、かや葺き屋根の廻廊、右に坐禅堂、それらを背景に宋雲先生が奏でる「蘇州夜曲」を聴いておりますと、ふと、今、自分たちが遥か遠い中国のひなびた古寺に佇んでいるかのように感じて心和みました。

本堂に響きわたる二胡の音色は、まさに、今流行の癒しの音楽そのものでしょう。また、中国の伝統芸である京劇のさわりの部分に触れさせていただきましたが、演じている役者さんたちの輝く雄姿には、非凡な運動能力と才能が秘められているということを知り驚きました。

日ごろ心せわしく過ごしております私たちにとりましては、まさに「忙中感動有り」のひと時でした。ありがとうございました。

悠久なる中国の調べ

矢板中央高校勤務　佐藤　勝宏

中国語を勉強し始めて、かれこれ二十年近くなる。それが高じて、我が家では専用のテレビアンテナを設置し、中国のニュースや劇を茶の間で楽しむ熱の入れようである。中国に関する興味は高まるばかり、個人でも何度も中国に渡った。国際交流の名のもとに二年生全員を引率して北京まで修学旅行に出かけた。現地で中国の高校生と交流会も行ってきた。

そんなわけで、「中国」に関する記事は不思議と目にとまるのである。今回の大雄寺での『牡丹と胡弓競演』の記事を目にするやいなや早速申込をした次第である。後日、住職倉澤良裕様から「中国で起きている新型肺炎（SARS）のため、予定していた演奏家馬琳さんが出国できなくなり、急遽日本で演奏活動を続けている宋雲さんと京劇に変更して実施する旨のご鄭重な電話連絡をいただき恐縮いたしました。

当日、妻と中国人の朋友を伴って三人で大雄寺に行きました。色とりどりの牡丹が絢爛と咲き誇る境内は混雑する客の声をも包みこみ静まりかえっていた。大雄寺特製の五味糖の甘味を賞玩しながら開演を待った。

住職様と司会者の簡明適切な紹介があって、宋雲さんの胡弓の演奏が始まった。わずか二弦の胡弓から響きわたる低く沈んだ、しかも円やかに潤うような胡弓の調べに酔った。たいへん短い時間に感じられた。演奏の合い間をとりもった魯大鳴、董健欣さんの京劇もよかった。京劇の台詞を聞き取ろうと試みたが、聞きとれたのはほんの数語であったが勉強になった。

午後の部の短時間の鑑賞であったが、悠久の中国文化に触れる貴重な機会を与えて下さった大雄寺住職様の計らいに深甚なる謝意を表したい。帰りぎわに感謝の言葉を申し上げるべきであったが、聴き終わったばかりの胡弓の悠久なる響きをしばし胸に留めておきたくて失礼ながら帰路につくことにした。

多　謝

大般若法会

平成十五年六月八日厳修

仏事法要として、年二回檀信徒参詣による大法要が厳修されています。六月八日の大般若法会と十月一日の大施食会法要であります。

大般若法会においては、法要と講演で実施しています。今年は、宝物収蔵庫「大雄寺集古館」の建設事業のため、黒羽町教育委員会学芸員の新井敦史様をお迎えして黒羽の歴史について拝聴しました。

講演内容を掲載いたします。

左記の黒羽藩主大関氏の系図は、参考資料です。

黒羽藩主の系図

十三代大関増次―十四代大関高増―十五代大関清増―十六代大関晴増―十七代大関資増―十八代大関政増―十九代大関高増―二十代大関増親―二十一代大関増栄―（大関増茂）―二十二代大関増恒―二十三代大関増興―二十四代大関増備―二十五代大関増輔―二十六代大関増陽―二十七代大関増業―二十八代大関増儀―二十九代大関増昭―三十代大関増徳（増式）―三十一代大関増裕―三十二代大関増勤―三十三代大関増輝―

黒羽の歴史

―中世～近世を中心に―

黒羽町芭蕉の館学芸員　新井　敦史

現在の那須郡あたりは、中世には那須荘と呼ばれ、平安末期頃は皇室領荘園であり、その現地管理人が那須氏であった。源平合戦での那須与一の活躍後、鎌倉期、那須氏は源頼朝による那須の巻狩（一一九三年）において現地で奔走するなど、幕府御家人として将軍に仕えていた。中世那須氏の本拠については、従来諸説があったが、近年、同時代（中世）に記された信憑性の高い古文書・古記録の検討により、那須氏惣領家の本拠が黒羽にあったことが明らかにされた。

南北朝内乱において、那須氏は、北朝方（足利尊氏方）として動き、下野国の内外で戦闘に参加した。一方、大関氏は那須氏（惣領家）の家来であり、室町期以降、白旗城（黒羽町余瀬）を本拠としていた。そして、一四〇四年には、白旗城内の北側に大雄寺の草創をみる。室町期には、那須氏惣領の地位をめぐる一族間の争いが展開され、黒羽も戦乱の渦中に巻き込まれた。そのあおりを受け、大雄寺も焼失したが、再建されるところとなった。この次期の一族間抗争は、室町幕府と鎌倉府との対立関係に連動しており、那須氏惣領家は前者と連携し、同庶子家は後者と結びつく形で、対立していた。その後十五世紀後半の関東の内乱（享徳の

乱）は、古河公方足利氏対関東管領上杉氏という構図により、関東を二つの勢力に分かれたが、上那須家（惣領家、黒羽、上杉氏方）と下那須家（庶子家、烏山、古河公方方）も対立し、後者優位のうちに、一五一四年頃、上那須家は断絶した。ここにおいて、大関氏ら上那須衆は、下那須家（烏山城主）の軍事的傘下に入るが、相対的独立性を有することとなった。

大田原資清との戦闘で大関増次敗死（一五四二年）により、大関家の名跡を継いだ高増（資清の子息）は、周辺の戦国武将たちと打打発止のやのとりをして、戦国乱世を生き抜き、一五七六年、本拠を黒羽城に移した。この時、白旗城内にあった大雄寺などの寺院も、黒羽城内に移転した。高増は、神仏への信仰心も篤く、大関家安泰を願って伊勢神宮や高野山清浄心院に祈祷を依頼したり、光厳寺（黒羽町寺宿）に縁楼して大虫禅師に師事したほか、大雄寺を再興して大関増次の追善供養も行っている。小田原合戦（一五九〇年）に際し、高増は、子息晴増と共に参陣し、豊臣秀吉より本領安堵（一万三千石）を受けた。これが近世大名大関氏の領地の基礎となる。

一六〇〇年の関が原合戦にあたり、大関氏の那須衆は、東軍（徳川方）に味方して、黒羽城と大田原城を主な拠点に上杉景勝の動きに備えた。慶長五年（一六〇〇年）と同七年の論功行賞により、大関氏は、一万九千二百石に加増された。その後、大関政増（晴増子息）は、一六一四年と翌年の大阪の陣に参戦している。

黒羽藩では、十七世紀前半から半ばにかけて、藩体制確立を目指し、くじ取りによる家臣十七騎の召し放ちや、検地を実施し、地方知行制にメスを入れた。一六六四年大関増栄は、江戸幕府より領知朱印状・領知目録を受給し、一万八千石の本高の確定をみた。この石高は幕末期まで変わらなかった。

十八世紀前半以降、黒羽藩では、財政の危機的状況が続き、幕末期に至るまで、藩政改革がテーマとなる。大関増備は、藩主の就任する直前、増墨と名乗っていた頃（一七六二年）「宝暦年中政事改正考草按」を著し、財政再建案を提示した。増備は、また十七世紀後半の政治体制に帰するための改革の一助として、先代藩主の日記を筆写し、先代藩主の書跡を保管していた。伊予の国大洲藩主加藤家からの養子として、文化文政期の黒羽藩主となった大関増業は、増備の改革案を受け、財政再建を目的として産業振興策に力を入れた。

近世黒羽の文化面で特筆されるのは、まず一六八九年の松尾芭蕉の黒羽来訪である。「奥の細道」紀行中、黒羽に最長期間逗留した背景には、当時の黒羽の文化的風土も想定されよう。そして、近世後期には、文化人大関増業や南画家小泉斐らを輩出する。

幕末期、遠江国横須賀藩主西尾家出身で黒羽藩主となった大関増裕は、幕政において活躍したほか、国元でも富国強兵策を推し進めた。同時に、増裕は、そうした改革にあたり、敬慕する増業の遺志を継がんとして、増業の遺品・伝書類を整理、保管していた。一八六七年十月の大政奉還の後、増裕は、密使を朝廷に派遣していたが、十二月九日謎の急死を遂げた。黒羽藩では、一八六八年一月に急養子として迎えた新藩主大関増勤のもと、戊辰戦争に際して、藩論を統一し、下野諸藩の中では最も早い段階で、新政府への恭順を表明した。黒羽藩兵は、一八六八年五月二十一日に出兵して以降、奥州各地を転戦し、明治改元後の同年十月十三日に黒羽が凱旋を果たした。一八六九年六月、版籍奉還により、大関増勤は黒羽藩知事に任ぜられたが、一八七一年七月廃藩置県により、黒羽藩は終焉を迎えた。

大施食会

平成十五年十月一日厳修

「大施食会は、ご先祖様を始め、志すご精霊さまにご供養し、施主の皆様の現世安穏と子孫繁栄をご祈念申し上げます年に一度の檀信徒合同法要です。御来山ご焼香下さいますよう、ここにご案内申し上げます。」と全檀家へご案内しております。寺院様約十二～三名の随喜をいただき、読経、焼香、ご詠歌をお唱えされ、厳粛のうちに執り行われます。法要後お塔婆をお渡ししますが、当日欠席の方は、後日大雄寺へお塔婆を受け取りに来ていただいております。

お塔婆は、各お檀家さまのご先祖へのお便りでもありますので、ご家族がご参拝下さることが、何よりの功徳であります。

一口法話
―禅語に学ぶ―

◎日々新又日新

「日々に新たにして、又た日に新たなり」と読みます。儒教大学の出典で「苟に日に新たなり、日々に新たにして又た日に新たなり」から。意味は、今日の自分は昨日の自分より精進努力して進歩成長すること。日々刻々と絶えず流れる時間に翻弄することなく、今を生きることの大切さを示す。

「日々新又日新」は、「作新」と同意義で、身近なところで使われています。

黒羽藩は一万八千石、藩主は大関氏。本丸は現在黒羽城址公園であり、菩提寺は大雄寺。山内に歴代藩主の墓石が林のように建ち守られています。藩校は、「作新館」と言い、大関私立作新館から明治十八年現在の黒羽小学校に改称されました。

「作新」の精神は黒羽小学校に受け継がれ、名称は宇都宮の作新学院に使用されています。

『私たち人間は、等しく一日二十四時間を頂いています。昨日の二十四時間は既に自分の手から離れています。明日の二十四時間はまだ手にしていません。今しっかりと握っている今日の二十四時間を如何に使うかである。』

◎只管打坐（しかんたざ）

禅宗には曹洞宗（そうとう）、臨済宗（りんざい）、黄檗宗（おうばく）の三つの宗派があります。それぞれの開祖は、曹洞宗は道元さま、臨済宗は栄西さま、黄檗宗は隠元さまです。

道元と栄西は、日本の僧で中国へ留学して禅を学び伝えました。隠元は、中国僧で日本に渡り帰化し禅を弘めました。インゲン豆は隠元禅師が中国から持ってきた豆でよく知られています。

道元の坐禅は、「只管打坐（しかんたざ）」です。「ただ　ひたすらに坐す」という意。「それに成りきること」坐禅は、坐ることに成りきることです。体と心が一つになるということです。

背筋を伸ばし体が真っ直ぐになれば、心が真っ直ぐになる。心が真っ直ぐになれば、思うことが真っ直ぐになる。「形は心をつくる」ということです。

『毎朝仏壇を前にして、体を真っ直ぐにして、線香を真っ直ぐに立てて、自分の鼻筋と線香とご本尊さまの鼻筋が真っ直ぐになるように坐る。そして、真っ直ぐになった心と体とを活かすこと。毎朝三分でも五分でもよい、仏壇に向かって実行してください。』と永平寺の宮崎禅師さまが、平易におっしゃっています。

さあ、今日から実行しましょう！

◎熏習（くんじゅう）

霧の中を歩いていると、知らない間に着物がしっとりしてしまうこと。みなさんもよく経験することがあるでしょう。「すぐれた人に親しんでいると、気がつかないうちに、自分もすぐれた人になれる。」という教えがあります。このことを仏教では、「熏習」と言います。

いつも香を薫じていますと、いつの間にか、その部屋や敷物まで香りが染みついてしまうように、人の精神や行いが心の奥底まで影響を与えていくことを意味します。

こんな話を聞きました。

『毎朝欠かさずご仏壇にご飯とお茶お水を供えお参りしています。ある日、私が家を留守にしたとき、孫が、私がやっていたことそっくりに仏様にお供えしお参りしてくれていたんです。頼んだわけでもなく親に言われたわけでもないのですよ。嬉しかったです。』

毎日の家庭生活で躾や規範意識などは、まさに親から子へ、孫へと熏習されて育つものです。私たち大人、親自身のありようがどんなに大切なことかを思わずにはいられません。

◎作務衣（さむえ）

作務衣

禅寺では、掃除のことを作務（作業勤務）といい、その服装着を作務衣と言います。動き易く着やすいため禅僧に限らず皆様も普段着として流行っています。

ところで、作務（掃除）は「汚れているから掃除をする。汚れていないので掃除をしない」と一般的に認識しているのではないでしょうか。

お釈迦さまのお弟子にチューダ・パンタカという物忘れのはげしい弟子がいました。ある日、お釈迦さまから箒一本を渡され、一生懸命掃除をすることを約束し「ちりを払え、垢を除かん」と心に念じ、一筋に掃除をし続けました。

掃除は、自己の行いとして、自己を見つめ、自己を磨くことであると悟り、チューダ・パンタカは、お釈迦さまの教えを守り伝える立派なお弟子となられました。

掃除は、汚れているとか、汚れていないとかで掃除をする、しないでなく、自分を磨く、心を磨くことであります。

例え話があります。チューダ・パンタカのお墓に生えた植物を「ミョウガ」

と伝えられています。また、ミョウガを漢字で書くと「茗荷」です。自分の名前を忘れるほどですから、名札を荷うと当て字しています。

作務（掃除）の功徳

一、掃除した人の心がきれいになる。
二、掃除した場所がきれいになる。
三、見た人の心がきれいになる。
四、地域社会がきれいになる。

ミョウガ「茗荷」

◎観　光

「観」の付く仏様に観世音菩薩（観音さま）がいらっしゃいます。観音さまは、さまざまな姿かたちに変身（化身）することで、私たち人間に救いの手を差し伸べて下さる仏さまです。つまり、世間（世）の人々の悩み、苦しみ、救いを求める切々とした願いの声（音）を、しっかりと観察（観）して、しかるべき手を打って下さる仏さま（観世音）です。

だから、十一面観音や千手観音、楊柳観音、馬頭観音などなど三十三に化身され、救って下さるのです。よって、古来から三十三札所めぐり（巡礼）が盛んに行われています。

かんのんさまがみている
ほとけさまがみている
みんなみている
ちゃんとみている

相田みつを　作

「観る」みると読み、心の眼でみる意味があり、「見る」みるは、二つの眼でみるという意味で違いがあります。

観光とは、過去の先人たちが残された光を心の眼でよくみることが真の意味です。したがって、観光だから酒を飲み、遊び気分で神社仏閣を訪れることは慎まなければなりません。

また、「観光寺ではありません。」という掲示板も疑問の表記であります。

神社仏閣は、心の眼でみて拝むところなので、「拝観」とか「参拝」と申しております。

心静かに「右手　仏、左手　衆生と合わす手の　内ぞゆかしき南無のひと声」

◎円　満

円満とは、月が満ちて円くなるように、人の心も満ちて円くなることをいいます。自らも仏となり、衆生もまた仏となることを円満するといいます。私たちそれぞれ円満な人格を備えたいものです。

ところで、黒羽藩主大関氏の家紋ご存知でしょうか。

柊囲み沢瀉〈大関沢瀉〉といい、黒羽藩主第十九代大関土佐守高増公が定めました。（参照五ページ）

従来の紋（抱き柊…柊の葉二枚抱き合わせ）の中に母方の水野家の沢瀉を加えました。

柊の葉一枚に八つの尖ったトゲがあり、二枚で十六個、このトゲで囲んだ雁木丸が柊囲み沢瀉です。十九代大関土佐守高増の母は、水戸藩水野重仲の養女（シャン姫）で、第十八代大関政増公の妻であります。（大雄寺にシャン姫木像や膳などが保存されています。）

この家紋は、大関家の菩提寺である大雄寺の寺紋でもあります。

柊は古来より「魔よけ」の意味として知られています。「角に柊」とか、節分行事でメザシの頭を柊の枝に刺して玄関に飾るなどの風習があります。

大雄寺の本堂前に柊の古木があります。これをよく見ると、古い枝につく葉は、トゲが無く円い。新しい枝につく葉は、鋭く尖っています。そして、中年の枝につく葉は、ところどころ円いのと尖ったところとが混ざっています。

柊の葉は、私たち人間の生き方を教えてくれていると思います。

「人間若いうちは、鋭くトゲを出しても、年齢とともに円くなる」老いて柊の葉のように心も円く円く。

柊囲み沢瀉〈大関沢瀉〉

◎「いただきます」・「ごちそう（馳走）さま」

フランスのブリア・サヴァラン（食の研究家）は「あなたが、どんな食べ方をしているかを話してください。そうすれば、あなたがどんな人か当てて見せます。」と言われたそうです。

食の乱れが指摘されて久しいですが、食事のときの挨拶「いただきます」「ご馳走さま」という言葉にどんな意味があるのか考えてみましょう。

「いただきます」とは、今、目前にしている野菜やお肉や魚の生命をいただきますという感謝する心を意味しています。「いのちをいただきます」と。

「ご馳走さま」は、まず、「馳走」という言葉の意味は、走り回るという意味ですから、食を用意するために材料を求め、そして、煮炊きをして駆け回って調理された、有難い食事に対して感謝する心を表現した挨拶なのです。

食事のこの挨拶の意味するところを良く噛み締めて、正しい食事をとらなければなりません。
次の三つの要点を肝に銘じ、いただきましょう。

●自分が生きるために動植物の尊い命を犠牲にしていること。
●動植物の尊い命を無駄にすることなく感謝していただくこと。
●食べることで得られたエネルギーを人のため社会のために生かす努力をすること。

宗門菩提

総代　佐藤　貢

昭和四十一年　九月、大雄寺三十六代倉澤良一住職が来家され、川田源昌寺より大雄寺住職に就任したが、総代世話人がほとんど高齢者で私と同年代位の世話人が欲しいので是非お願いしたいとのことで、お受けし九月三十日付で就任した。
当時の総代は、大野清司氏（筆頭）、瀧澤金一氏、伊藤虎雄氏、稲野正典氏の四氏、世話人では荒牧兼作氏、渡辺文雄氏、奥沢操氏等、若手で塚本武氏が行事の進行役などを受け持っていた。

昭和四十二年　良一住職の叔父岩渕益蔵様より寄贈された梵鐘、ホテル花月より大雄寺まで役員と稚児行列で運搬されて、鐘楼堂に設置された。

昭和四十三年　文化財の調査、指定の時期でもあったが、良一住職の強い要請により大雄寺の建造物本堂他七棟、経蔵など全伽藍が栃木県有形文化財の指定を受けることができました。（文化財の指定を受けた建造物等の保存修理を行った場合には、補助金が交付される仕組みになっている）
大雄寺は室町時代の様式を持つ古い建造物で長年大修理など行っていなかったので、いずれの建造物も老朽化が進み、保存修理を余儀なくされていた。
良一住職はこの老朽化した大伽藍を完全な寺院に再興して、後世に引き継ぐ強い決意を秘め、大雄寺三十六代の責務とされたと思います。

昭和四十六年　最初に保存修理を手がけられたのが、納屋同然になっていた坐禅堂で全面解体復元工事に着手された。檀信徒の初めての寄付が勧募され、二ヵ年継続事業で禅堂として立派に完成された。

昭和五十年　本堂、御霊屋、総門、廻廊、玄関の五棟を三ヵ年継続事業で保存修理工事を着手、良一住職は、設計士の中里茂先生と連携を取りながら、県庁の文化財保護課に陳情、請願をされた。私は一世話人であったが、住職は同年代で一緒に行動できるとの思いからか、県庁行きなどは何時も声をかけられて随行した。
保存修理も三ヵ年を経て、昭和五十二年に無事完成して盛大に落慶法要が厳修された。

昭和五十二年　後継者の良裕和尚が婚約されて結婚式を挙行することになり、その媒酌を私と礒正次さんがお受けすることになり、その大役を無事果たし得たことは私の終生の喜びと思い出となることです。

昭和五十四年　研修道場月光館建設を二ヵ年継続事業で着工、資金は勧募せず、借入で対応する。私も特別建設委員となり五十五年に完成された。

昭和五十六年　四月十四日、大野清司筆頭総代の辞任に伴う後任総代の人選で先輩世話人が多くいる中、不肖私に白羽の矢がたち、全体役員会でも満場一致で承認され、大雄寺檀徒総代（責任役員）に就任した。
開創六百年の古寺県文化財の指定、檀家八百五十戸、名刹大雄寺の檀徒総代身の引き締まる思いでした。

昭和五十七年　経蔵・輪蔵二ヵ年継続事業で保存修理の工事着工、昭和五十八年完成落慶。

昭和五十八年　曹洞宗栃木県宗務所護持会総会に第五教区長の良一住職と宇都宮松林寺の会場に出席、栃木県宗務所護持会の役員改選があり、選考会の報告で突然会長に黒羽山大雄寺総代の佐藤貢さんと発表され唖然としていたが、新会長さんからご挨拶と言われ、腹をきめて会長就任の挨拶をした。引き続き大本山宗門護持会の評議委員にも就任することになる。評議委員は、毎年一回四年間永平寺と総持寺の会議に出席した。

昭和六十三年　栃木県宗務所第五教区の教区長は、大雄寺の良一住職であるが、第五教区護持会は有名無実で、資金も組織もないので再設立することになり、西那須野町の宗源寺で設立総会を開催して、初代護持会会長に選任されて就任する。以後活発な実践活動で県内教区でも上位ランクの教区との評である。

昭和六十三年　昭和六十二年に新庫裡を建設完成させ、六十三年は、大雄寺伽藍保存修理の最終の庫裡保存修理三ヵ年継続事業で工事に着手、続いて平成元年に防災施設三ヵ年継続工事も着工した。平成二年庫裡保存修理完成落慶、続いて平成三年には防災施設事業も完成した。

平成三年　昭和四十一年大雄寺三十六代に倉澤良一師が住職に就任して老朽化した大雄寺建造物の保存修理を志して、二十有五年殆ど工事を休む年はないくらい、精魂こめて復元工事に没頭された。その甲斐が報いられ全伽藍と山内の施設等が見事に復元整備され、県内は勿論、県外にも誇れる総かや葺き、廻廊付の黒羽山大雄寺が見事に完

成実現され、県内外より多くの参拝、観光客が団体バス等で訪れるようにもなりました。

この完成の陰にはいろいろと困難もありました。檀家にとっては、引き続きの工事費の寄付に、又か又かの苦言、世話人さんの勧募のお骨折り、住職が出向いての話し合い等々、いずれにしても檀家の皆様の深いご理解とご協力の賜物でございます。一言記しておきますが、良一住職が復元工事をする経費の拠出を考えて、いち早く県の文化財指定を受けたことです。ほとんどの工事経費は、八十パーセントが県補助金、十パーセントが町補助金、残り十パーセントが檀家負担で済んだのです。

平成三年　良一住職も念願の大事業が一応終了したので後継を副住職良裕師に託して退董したいとのことで総代会世話人会等で検討承認され、良裕師が三十七代住職に決定し、翌年六月に退董式と晋山式を行うことになる。

本寺成高寺に大雄寺三十七代住職に副住職の倉澤良裕師が、就任の挨拶に出向くことになり、私が随行した。その折成高寺岡田巳成老師に私も退董される良一老師と二十五年余役員として行動を共にして微力を尽くした仲なので良一老師と一緒に退任させて頂く考えをお話したところ、岡田老師から住職が変わり新住職は大変な時期なので、是非今しばらく総代として見守って下さいと話されて、この時私も二代に亘るがしばらくの間三十七代に仕える心決めをした。

平成四年　六月七日　大雄寺三十六代倉澤良一老師退董式並びに三十七代倉澤良裕師晋山式挙行　当日の役員関係（節分会役員等含む）七十三名、寺院関係五十名、私、檀信徒代表に推挙される。全檀家に案内状を発送

§式次第§

午前八時受付開始

八時三十分　**新命住職安下処・稚児行列で出発**

九時十分　**退董式**　感謝状・記念品贈呈に総代佐藤貢、退董挨拶良一老師

十時　**晋山式**　辞令伝達　法衣授与に大関和雄氏、袈裟授与に総代増田譲氏、檀信徒代表祝辞　総代佐藤貢、謝辞　新命住職

午後一時　**祝宴**　黒磯石山　出席者一七〇名

挙式終了後の記念撮影の時、前町長で県会議員の後藤伊位氏に「あなたのような総代がいるから、このような立派な、盛大な行事ができるので、なかなかこれだけの事は他ではできないよ」と言われた。お世辞でも有難い言葉をいただいた。いづれにしても一世一代の大行事が厳粛に無事終了し、檀信徒代表としての責務を果たし得たことは私にとって生涯忘れることのできない思い出となります。

新命の三十七代良裕住職も、三十六代の寺院運営を基に新しい時代感覚を取り入れて護持発展に意欲的に取り組まれている。

平成五年　墓地の整備で主要墓参道のコンクリート舗装工事着工完成。

平成七年　大雄寺開創六百年記念法要の厳修、記念事業として記念碑の建立、石仏十六羅漢像を安置し「ラカンの丘」を開設

平成十年　本堂屋根カヤ葺き替え二ヶ年継続事業着工、十二年完成落慶（経費は平成八年に「伽藍保存基金」を開設して五年間檀信徒による積み立て）

平成十三年　大雄寺境内でコンサート「牡丹と雅楽の演奏」毎年このような演奏会が企画され、ＮＨＫテレビ放映。

曹洞宗開祖道元禅師七百五十回大遠忌、大雄寺主催「大本山永平寺参拝記念団参」を実施、六十一名参加する。

平成十四年　大雄寺三十六代東堂倉澤良一老師、春の叙勲で藍綬褒章を受章され、祝賀会実施、ホテル花月にて、招待者十名、出席者一三六名

黒羽藩主大関氏菩提寺として開創六〇〇年の伝統の証ともなる宝物等を後世に伝えるため、宝物収蔵庫を建設することになりました。

平成十五年　宝物収蔵庫「集古館」（良裕住職命名）三月工事着工、十月完成（落慶式は六月予定）

三十七代住職は、境内整備、環境の美化に、そして総かや葺き屋根の本堂や禅堂、庫裡等大雄寺の護持と発展に努め、開かれた寺院を目指し、精力的に尽力されています。

大雄寺境内はいつも綺麗だと好評ですが、その影には朝夕素足で、家族を含めて拭き掃除に掃き掃除をする姿を目にします。

三十六代東堂は、大雄寺再興に一世一代を掛け実現した功績により本寺成高寺より重興の称号を授与され、三十七代を補佐しながら悠々自適の生活をされています。

平成十五年十二月吉日

黒羽山大雄寺の永遠の発展と檀信徒皆様の更なるご協力とご多幸を祈念して

檀徒総代（責任役員）

佐藤　貢　謹書

カンボジア「コ・ヴェアン」小学校贈呈式に臨んで

寺族　倉澤　與志枝

「曹洞宗婦人会」主催のカンボジア研修旅行の計画を知り、きっと貴重な体験になるだろうと方丈から勧められ、海外は初めてのことで、少々不安もありましたが、思い切って参加して、た

いへん有意義な七日間を経験しました。

「曹洞宗婦人会」では、カンボジアに小学校を建てるボランティア活動が展開されていますが、平成十五年二月二十八日、その学校贈呈式に臨むためにカンポート州「コ・ヴェアン小学校」に向かいました。プノンペンから約一五〇キロ離れた村、専用車で悪路に揺られ、乾期のため、埃が立ちこめる中、狭い道路を走らせ、ところどころ見える椰子の葉で作られた家、また、家の軒先には雨水を溜める大きな甕が置かれる粗末な家。草も生えてないため痩せ細った水牛が、時折り目に入ってきます。

約五時間後、やっと「コ・ヴェアン小学校」に着くと、どこから集まったのだろうか?大勢の村人や子供たちが、私たちの到着を待っていました。炎天下の中、笑顔で小旗を振りながら迎えてくれ、私は、興奮と緊張が入り乱れた複雑な気持ちで、子供たちの中に入っていきました。

婦人会から預かってきたノートやクレヨンなどを一人一人子供たちに手渡しました。こぼれる笑顔は、今も私の目に焼きついています。子供たちとの交流の場では、折り紙や縄とび、コマ回しなど一緒に楽しく時を忘れ、触れ合うことができました。言葉はわからなくても、心と心は通じ合えるものです。共に楽しく過ごすことができました。

世界には、まだまだ教育が行き届かない多くの子供たちがいます。この研修旅行を通して多くのことを学び、体験をしてきました。これからもカンボジアで学んだことを活かしながら、寺族として勤めてまいりたいと思っています。

平成十五年三月十六日　記す

土ぼこりの中で

秋田県立大　倉澤　香澄

・・・どう　言葉にしたらよいのか
写真を撮るでもなく　考えるでもなく
見逃してはなるものか
じっと　目に焼きつけるのが精一杯だった

これまでの歴史と
今を生きる人びとの生活
将来を担う子どもたちの瞳
土ぼこりが舞う　農村も
急速に発展する　プノンペンも
リゾート化する　シェムリアップも

カンボジア

自分のため　彼らのため
日本　アジア　世界・・・のために

頂いた感謝状は
私に課せられた　約束手形だろうか

カンボジア撮影日記

大雄寺の四季

牡丹（５月上旬）

シャガ（５月上旬）

蓮（８月中旬）

紅　葉（11月上旬）

平成十六年の予定

① 集古館落慶式厳修
② 集古館開館（宝物公開）
③ コンサート実施
④ 屋外トイレ新築工事

平成十六年の行事

一月一日より	初　詣
二月一日	節　分　会
三月十七日～二十三日	春彼岸会
四月十八日	集古館開館（宝物公開）
五月一日より	牡丹開花
五月八日	花まつり
五月九日	コンサート開催
六月八日	大般若法会・集古館落慶式
八月十三日～十六日	盂蘭盆会
九月二十日～二十六日	秋彼岸会
十月一日	大施食会
十二月十八日	観音祈願法会
十二月三十一日	除夜法会

大雄寺で開催している講座 参加してみませんか！

●日曜坐禅会
毎月第２と第４日曜日　午前７時30分～９時まで
坐禅・作務・茶話　初めての方歓迎

●ご詠歌教室
毎月第２と第４水曜日　午後１時30分～４時まで
矢板市　瑞雲院住職様が優しく教えていただけます。

●婦人読経会
毎月第１火曜日　午前８時30分～９時30分まで
読経・法話・茶話

●写 経 の 会
毎月第１火曜日　午後２時～４時まで
静寂の中経文を写す行です。気軽にご参加できます。

●石仏教室
毎月７の付く日（７日・17日・27日）

※ 詳しくは大雄寺にお問い合わせ下さい。

大雄寺ホームページ

詳細説明、一口法話、お知らせページ、掲示板など掲載
U R L　http://www.daiouji.or.jp/
E-mail　ryoyu@daiouji.or.jp